

文化記号論 : ロシア文化記号論

Iouri Lotman & Boris Ouspenski, *Sémiotique de la culture russe*, traduit du russe et annoté par Françoise Lhoest, coll. < Slavica >, L'Age d'Homme, 1990.

第1部：18世紀末までのロシア文化のダイナミズムにおけるモデルの二重性とその役割
(I^{ère} partie : Iouri Lotman & Boris Ouspenski, « La dualité des modèles et son rôle dans la dynamique de la culture russe jusqu'à la fin du XVIII^e siècle », pp. 21-55)

文化へのアプローチ

中世ロシアのシステム

西欧世界（キリスト世界）はあの世を天国、地獄、煉獄と三分割していたが、ロシアでは中間項がなく、天国と地獄しかない

現世において、行いは罪人か聖人かにしか行き着かない

中間項がないので、変動は急である：進歩主義と反動主義

【東方正教会】

(Eastern Orthodox Church) ビザンチン帝国の教会を起源とし、1054年ローマ・カトリック教会とのシスマ（大分裂）によって成立した東方諸教会の総称。コンスタンチノーブル（現イスタンブール）総主教を名目的首長とはするが、ギリシア正教会・ロシア正教会など各教会は完全に独立。イコン崇敬など神秘的の典礼をもつ。日本ハリストス正教会もこれに属する。日本でギリシア正教とも総称される。東方教会。（広辞苑第5版）

1 ロシアのキリスト教化とピョートル一世の改革：旧 vs 新 [p.24]

ロシアと西洋、キリスト教と異教、真の信仰とにせの信仰、知と無知、高みと低さとの相同化

1.1 キリスト教化は古ロシアの自意識のメルクマール

ロシアの土地が《新たな》ものとして規定される：新たな民

古い異教の寺院があった場所にキリスト教の教会が建てられる

：古いものを新しいものに取り替えただけでなく、古いものを否定的記号と共に新しいものの中に書き込む

ビザンチン帝国（東ローマ帝国）からキリスト教を取り入れたが、ビザンチンを古いものとし、ロシアを新しいものに性格づけた

ビザンチウムにおいてはイスラム教が正教派に打ち勝ったが、ロシアにおいては、逆に、イスラム教に勝ったのが正教派であった

1.2 ロシアの土地を新たなものとみなすことは、逆説的には、極度に古風な文化的モデルのダイナミズムと一致する

新たな文化の構築の二つのモデル

1) 前段階において形成された深層構造が古い構造の特徴を保持しつつ名前を完全に変える

この場合、新たなテキストは古い文化的図式を保持したままで形成される

2) 変わるのが文化の深層構造である場合

変わりつつも、先行文化のモデルへの依存が見いだされる、というのも深層構造は諸記号の転移と共に先に存在していたものの豹変によって構成されるから

具体例：前キリスト教的異教思想の、キリスト教文化システムへの滲透の様態

：異教の神々の二重の運命

* 悪魔との同一化：ネガティブな地位を占めるが、新たな宗教システムの中では合法化される

名前は残る：Volos : Veles 悪魔 Volosatik へ

* 自らと機能的に入れ代わる聖人と同一化する

機能が残る：Volos : 聖 Blase (Vlas) や聖ニコラなどへ

教区民は旧寺院の場所を聖なるものとみなすが、聖職者にとって、この建物は、悪魔を彼らの領域から追出すことによって、かくて不純であった場所を浄化することを意味する

：見捨てられた教会は悪の力の住処となる

サウナ、乾燥室、鍛冶屋は、キリスト世界における異教徒寺院の運命の面白い例

：サウナの力は十字架の力というよりは悪の力に属す

：祝日に人が教会へ集まる時、魔女たちはサウナに集まる

ロシアのフォークロアにおいて、寺院を表す bozena という語はサウナを意味することができる

キリスト教という新たな文化は古い文化との対比において構成され、古い異教の文化はアンチ文化として文化の必要条件となった：古い文化の完全な消滅を望んだこの新しい文化は、古いものを保存する強い要因となる かくして日常の次元の中に生き残った正教会派は、東洋スラブ文化の異教信仰の再構築にとって貴重な源泉なのである

1.3 キリスト教の導入はロシア人に東方キリスト教と西洋キリスト教との論争をもたらした

新規さは古きものを複雑に合体させるだけでなく、自らの対極であるという意識を主観的に持ちつつ古いもののジェネレーターにもなる

1.3.1

2 中世末期は、初期とは反対に、《古い時代》の記号のもとに位置づけられる [p.36]

2.1 17世紀の民衆の不満が古い時代への回帰の欲求を起こさせる

人間社会のおぞましい無秩序に対立した神の超自然的世界という考えが広まる

ex. Kircha Danilov の詩集 (17-18世紀)

：自然界の描写：叙事詩における《空間》は現世の《空間欠如》(社会的悪の象徴)に対比される

：現実社会の秩序を自然界のものに投げ出すという考えはルソーやトルストイを予兆する

新しさは人間の歴史であり、古いものは万物の根源、神の次元に属す：古いものは現実の伝統を断ち切る非歴史的なものである

2.2 前へ進むということは失われた真理への回帰であるという考えが広がっていた

年取った信者の中には、《古い、異教》vs《新しい、キリスト教》という対立が、《古い、キリスト教》vs《新しい、異教(悪魔の同義語)》という歴史的対立になる かくして《古い 新しい》は《ロシアの土地 西欧》になる

：正しいもの、神からでたものは古いもので、罪深いもの悪魔からでたものは悪化された新しいものとなり、西欧は《新たな》土地とみなされる

前時代の文化の記憶を留めることは無知とされ、その記憶を断ち切ることが祝福された

：覚えていることは無知であり、忘れることが教化されたとみなされた

3 18世紀は「新しい」という記号のもとに現れる

《新しい》 = 善、《古い》 = 悪

ピョートル一世の時代、人々はロシアを再生されたもの、新生されたものとして描いた

ex. Théophane Prokopovitch, *Panégyrique de la bataille de Poltava* (ポルタヴァの闘いの称賛)

: 「これからは力強く、成熟し、再生されたロシア」と表現

: 「ローマ皇帝アウグストゥスは、煉瓦作りのローマを引継ぎ大理石のローマにして残したと言ったが、我らの帝王にその言葉を引用するのは、むなしくて全く称賛にはならない。というも、彼は木造のロシアを受けつぎ、それを黄金のロシアにしたのだから」

18世紀ロシアの文化は全く世俗的（修道院外的）なもので、国家の方を向いており、教会には敵対していた

が、その新しさは伝統的なもので、西欧のモデルに依拠しているというよりは、古い文化の裏返し：冒瀆的かつ、反聖職者的

ポルタヴァ【Poltava】

ウクライナ東部の都市。鉄道の要衝で、食品工業が発達。1709年ピョートル大帝がスウェーデン王カール12世を破った所。人口32万5千(1993)。(広辞苑第5版)

3.1 18世紀の文化は「啓蒙」(lumières) で表されるが、前ピョートル時代のロシアではすでに

: 「啓蒙する (illuminer : prosvescati) 」というのは洗礼する、洗礼を受けるに値するという意味であった

聖 Vladimir を称える讃歌の中にこの用例がある

Joseph de Volokomamsk は異端に対立する自らの著作を *Illuminateur* と呼ぶとはいえ、ピョートル大帝の存命中に、ヨーロッパ化された世俗文化を示す用法も現れる
: この意味において、新たな文化の創造はロシアの第二の洗礼として解釈された

Théophane Prokopovitch の悲喜劇 *Vladimir* では、主人公は明らかにピョートルの alter ego として現れるし、キリスト教の導入という改革はピョートルの改革と結びつけられる

(フェオファン・プロコポーヴィチ『ウラヂーミル』1705)

3.2 実践的無神論に変貌する自由放蕩主義が信仰の廃棄というよりは他の信仰への移行という性格を持つことがあるという事実は示唆的である

前ピョートル文化は正教徒の意識から異教徒的イデオロギイの世界を排除はしていなかった：そのイデオロギイは神話（悪魔の）の形態の下で保持されていた

キリスト教徒の行動は公のものであったが、異教徒の行動は隠され秘密にされていた

啓蒙の世紀はこの構造を廃止することなく、それを逆さまにしたのであった

文化的領域における教会勢力の独占に対して、世俗的国家と教育システムに導かれた闘いは、貴族集団の意識において、突如、異教徒の再生として再解釈された

二重の信仰が保たれたが、関係は逆転していた

: 公的な生活や非聖職者の行動意識が前キリスト教的、東方的特徴を食いつくし、正教会派は隠蔽された秘密裏のもとに保持された：内的世界、秘密裏の領域に隠れた正教会は、勝者であった

3.3 日常生活における主観的《ヨーロッパ化》はヨーロッパの生活様態への実際の接近とは何ら共通点を持たない

その影響は、キリスト教西欧の生活において実現したことの無い反キリスト教的形態の構築の

中に決定的なものとして見うけられる

：農奴のハーレム、前ピョートル時代には考えられない制度であるが、18世紀には普通になる：
農奴のハーレムは古代の生き残りではなく、18世紀の産物である

ハーレムの存在はヨーロッパ化されたものと理解されており、若い女性はそこで教育を受けた

3.4 ピョートル大帝以前のロシア文化の基盤の一つは、教会スラブ語と口語ロシア語との二つのレベルへの特殊な関係であった

3.5 ヨーロッパ化に負うところの変化はロシア文化の古典的特徴を堅固なものにする

この変化は14-15世紀のロシア中世文化に存在していた**古典的記号論モデル**を明らかにするが、そのモデルはもっと古代に遡るように思える

この点において、一般論とは反対に、18世紀は機構的にロシア文化に属するのである

地理的概念の形成

：啓蒙（光）の王国としての西欧の概念が強固なものになり、18世紀、ロシアの新たな啓蒙家にとって西欧への巡礼が重要になる 18世紀の貴族にとって、パリ旅行がいわば聖地への巡礼になる

3.6 18世紀後半は中世ロシア末期の文化モデルとパラレルな関係にある

文化から自然への回帰への扇動の復活 過去との断絶の意識がオリジナルな形態を求めるようになる 人工的に構築された過去のユートピアへのアピール

記憶の発明、過去のユートピアの再構築の過程が驚くべき一致を可能にする

：Radiscev にとって、古典的異教者の古代、ロシアの異教者の古代、正教会の古代はほとんど差異がない

終末論的考えが広まる 中世ロシアと18世紀文化の総括が類型的パラレリズムを表すという考え

文化の源泉探究の問題は多様な同一化の方法で解決される

：古代ギリシャ、スラヴ文化などとの関係

あらゆる同一化は、再構成された国家文化と貴族の現実的日常生活、フランス化され西欧化された非聖職者の文化間のラディカルな対立の基盤の上に実現している

18世紀ロシア文化は中世の繰り返しではない：真のヨーロッパ化がなされる

文化とは、過ぎ去ったものが過去の中に閉じ込められるのではなく、つまり時間の自然な流れの中の出来事として現れるのではないように作られている

文化の記憶の中に固定された過去は、恒久的で潜在的な存在を獲得する

しかしながら、文化の記憶はテキストという貯蔵庫の中だけで形成されるのではなく、生成的メカニズムとして形成される：記憶によって過去に結びつけられた文化は、自らの未来だけでなく自らの過去をも生成し、その意味において自然の流れに対立するメカニズムとなる

生きた文化は、過去の繰り返しではなく、構造的に機能的に新しいシステムとテキストを生み出す：とはいえ、そうした文化は、過去の記憶しか保持できない

考察された時代のロシア文化の特殊性は、過去のと繋がりが、主観的に方向性が過去と完全に断絶された時に、あるいは逆に、過去への方向性が記憶や現実の伝統と完全に遮断された時に客観的によりいっそう強く感じられる

中世ロシア文化研究の新たな諸相

(Iouri Lotman & Boris Ouspenski, « De nouveaux aspects de l'étude de la culture russe médiévale », pp. 57-74)

この30年間で中世ロシア文学および文化研究は飛躍的に発展した

：科学アカデミーロシア文学研究所の中世ロシア文学部門が果す役割

その研究が、これまでの中世ロシア文化に関して確立していた概念体系をくつがえした

ex. Dmitri S. Likhatchëv, *Poétique de la littérature russe ancienne*, 1973.

：芸術現象としてのロシア文学の新たな概念の提出

ex. Likhatchëv et Pantchenko, *Le monde du rire dans la Russie médiévale*, 1976.

伝統的考え：歴史家は書かれたソースの総体と文化との間に同価の記号を置く (p.58)

テキスト内にダイレクトに反映されない領域（口頭によるコミュニケーション、身振り、日常の儀式など）は排除される：テキストを文化そのものと見ることの危険性

Likhatchëv et Pantchenko の研究の独創性 (p.60)

行動様式 (comportement) に結びつけられた文化一般の一部分としてのテキストの研究

：広義において、行動様式はそれ自体の文法、文体、ジャンルを持つ 心理学的観点 (p.67)

膨大なテキストの研究により、行動様式が浮かび上がる：意味、システム、倫理的コード

「笑いの世界」：バフチンの影響

cf. ミハイル・バフチン、『フランソワ・ラブレ - の作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』(1970)、せりか書房、1980

「笑い」（バフチン）：その時代の人々の行動に課せられた厳しい宗教的倫理的制約の外的要素

：笑いは中世の倫理的社会的階級を無効にする：無信仰でアナーキー 中世人を社会的制度の帝国から民衆のカーニバル的ユートピアへ連れ去る

Likhatchëv et Pantchenko による「笑いの世界」

中世ロシア正教会文化は神聖と悪魔性との対立のまわりに形成される

：神聖は「笑い」を排除する：キリストは決して笑わない 悪魔は神聖なるものの反対とみな

される：真面目でないこと ロシアで悪魔は「道化師 (bouffon)」と呼ばれる (p.62)

中世の人は成功や安全、チャンスを手に入れるために二つの方法を試みることができた (p.64)

：祈り、教会や聖人のとりなしにすぎること

：「闇の行為」：魔法、魔力

これら二つの方法は、二つのシンメトリックなシステムとして補完され、二重化されていた

魔術的行為のシステムは宗教的セレモニーの逆転した儀式となる

魔術的行為のシステムは儀式的笑いを含むが、それはコミックなものではない

魔術的儀式の逆転的性格 (p.64)

スラブの異教は死者の信仰との結びつきが強い あの世の概念：現世の裏返し：鏡像

逆さまの世界の概念 ヨーロッパ的カーニバルにおける異教的要素とロシアの儀式との間の差異

：ヨーロッパ的カーニバル

「面白いものから そればかり配するに及ばない... 笑いたく人を直面目な世界から飛び出す

させる

：ロシアの馬鹿笑い（カーニバル的民衆の笑い）

おかしなものと恐ろしいものが結びつく

遊びは世界の外側へ連れていくのではなく、禁止地帯（真面目であることが墮落となる世界）へ入り込む

ロシア的な冒瀆も魔術的笑いも、コミックなものではないため、本来の《笑いの文化》には属さない

Likhatchëv et Pantchenko の著作の功績の一つは、文学テキストと民衆の行動様式との接近
中世ロシアの社会的行動の心理学を重視

日常の行動様式における演劇性とスペクタクル性への科学的関心

ex. 中世ロシアの *fols-en Christ* における演劇性や、*Terrible* における遊びの要素の分析
芸術的形式では作者と観衆との境界は明白であるが、フォークロアの芸術においては観衆は参加を求められる：ダンスなど：観衆の主体的参加

この違いは極めて機能的である (p.67)

中世ロシアの貴族の館で催されたフォークロアのスペクタクルは、しばしば非フォークロアのテキストに変換される

ex. Samuel Collins によれば、ロシアの貴族の宴会におけるダンスは単にスペクタクルであり、仕事である：ダンスしているものは楽しんでいるのではなく仕事として踊っている

《笑いの文化》は職業的役割を排除する (p.68)

語るものとその観衆は共通の行為の参加者となり、互いの立場が入れ代わる：パフチンがいうところの民衆の笑いの脱職業的両義的性質

Likhatchëv et Pantchenko が問題にする現象は、むしろ観衆の演劇に近い

イワン雷帝 (Ivan le Terrible) は作者と観衆との役割を交互に演じる

演劇の特徴的記号 (*signes caractéristiques*) 芸術家と観衆は異なる情動を体現する

：観衆は笑うが、役者は笑わずために演じる：役者は笑わず、笑いを演じる（カーニバル）

中世ロシアでは遊びは限定的に捉えられていた (p.70)

真面目な価値観の世界は遊びの世界を排除する：真面目な状況下では、遊びは冒瀆的非キリスト教的行動とみなされる

行動が正しければ正しいほど、その人間は尊敬される 様々な人間の上にキリスト教徒の行動が位置づけられる 通常の人々の振る舞いは、聖人に比べ無作法 (*incorrecte*)

聖人は人間のレベルにおけると、《逆に》罪人のように振る舞う。その時、聖人は罪人と派その行動ではなく、その恩寵によって区別される

ex. *Vie de saint Procope d'Oustyoug*

：夜に教会へきて、左手に3本の火掻き棒をもっている：冒瀆的パロディ

fols-en Christ : 聖人は人間化するために自分のものではない振る舞い（罪、非常識な行動）をする

イワン雷帝の行動は *fols-en Christ* において実現される (p.72)

他の著作でロシア皇帝自身が自らを *Parthène Urodivy* (*Urod* : *monstre*) と言っている

fols-en Christ の行動のコード：「神聖なるものは最悪なものに基づく」：逆さまの世界

Likhatchëv et Pantchenko の著作において、笑いの次元についてはまだ議論の余地がある

文化の二つの原型モデル：「契約を結ぶこと」と「他人にまかせること」

(Iouri Lotman, « Deux modèles archétypes de culture : “conclure un pacte” et “s’en remettre à autrui” », pp. 140-155)

社会文化的モデルの分析 二つの特徴：魔術的なものと宗教的なもの

魔術システムの諸特徴

：相互性

そこに関する二つの動因 (agent) は互いに能動的役割を持つ

ex. 魔法使いが何らかの行為を遂行し、その行為に呼応して、要請された力が自らの力を
実行する

魔術システムにおいては一方通行の行為はない

：拘束

当事者の何らかの行為は他の当事者に予見された行為を必然的に引き起こす：魔法使いは
超自然的力に対し、わずかしか権力を持たないにもかかわらず、自らの意に反して行動する
ように強制する：当事者の一方が何らかの行為を行うと、それに呼応して他の当事者の行為
が要求される：権力は分配されている

：等価性

魔術システムの当事者間の関係は等価であり、慣習的記号の交換と同一視し得る

：契約性

両当事者は、表明されたもの（契約の締結や宣誓など）であれ、暗黙のものであれ、ある
種の慣習的タイプにかかわる

契約の存在は、同時にそれを破棄する可能性をも想定する：交換の慣習的記号的性質から
ごまかしや情報歪曲の潜在性が派生する

宗教的行為当事者間の諸関係：交換ではなく、無条件的自己犠牲が基本

：一方性、片務性

他人の権力下に身を置く主体は保護を期待するが、彼の行為とその反応行為の間には義務
的關係はない：報酬の不在は関係断絶の口実として役立つのみ

：関係内における制約の不在

一方の当事者が全てを差し出したとしても、相手は受け取るに値する者を拒否したり、受
け取るに値しない者へ与えたりもできる

：等価性の欠如

本質的価値が条件的または慣習的性格を持ち得るとは考えられない コミュニケーショ
ンの方法は記号ではなくシンボルに由来し、その性質は表現が内容と異質なものになる可能
性を排除し、ごまかしや解釈を排除する

：このタイプの関係は契約ではなく、無条件的贈与である

文化心理学モデル

現実には、宗教にも魔術的心理（学）の介入なしにはなされない：現世での人間と神との関
係における等価と交換の特徴をあきらめつつ、現世とあの世との間の関係システムを打ち立て
ることであの世での報酬の考えを持つ

前諸世紀のロマン式教会は魔術的であった（神への供物）が、皇帝への敬意は国家との契約
という形態を持っていた

キリスト教徒は厳格な宗教を持っていたので、法的契約的意識を持たなかった ローマ人
にとって、そのことは国家の概念そのものの拒否とも映った

ロシアにおける異教信仰は魔術的、シャーマンの特徴を持っていた

ロシアのキリスト教化：キエフ国家の設立と一致する

異教とキリスト教への信仰が社会関係の二つのモデルをもたらす

：君主と義勇軍との関係 契約 封建制へ：ロシアの伝統的魔術的異教

シャーマン【shaman】

自らをトランス状態（忘我・恍惚）に導き、神・精霊・死者の霊などと直接に交渉し、その力を借りて託宣・予言・治病などを行う宗教的職能者。シベリアのツングース系諸族の例が早くから注目された。

シャーマン。 巫覡（ふげき）、 巫女（みこ）（広辞苑第5版）

西欧では契約はローマ的世俗的伝統の権力の享受と感じられるが、ロシアにおいて契約は異教的なものであり、それが社会的価値を持つ

西欧における契約はポジティブでもネガティブでもなく、悪魔や聖なる力や狼とも契約が交わされた (p.142)

ロシアの伝統にはそういう事例はない：契約は悪魔的な力によって結ばれる (p.143)

西欧騎士道的社会での契約は神と人間、主従関係に依拠するが、ロシアでの契約は極めて人間的な事柄

記号とコトバによるコミュニケーションの慣習が現れるのは悪魔 (malin) との関係においてである：多義的な語の解釈の違い

ex. ロシア民話：「ヘビとボヘミアンの民話」

：「ヘビがシュウという音を出し木々の葉を落とすヘビがいた。ボヘミアンが自分がシュウというとおまえの目が落ちるから目を隠しなというと、ヘビはそれに従う。ボヘミアンは棍棒でヘビの頭を叩いて音を出した」

この種のだましは悪魔やヘビに対しては可能であるが、神や聖職界に対しては不可
アダムに関する聖書外典（ヴァリエント）

ex. イヴとカインの病気回復を条件に悪魔と契約するアダム (p.144)

：悪魔がイヴに、生きていたあいは神に属するが死ねば悪魔に属すと書くように命じる

ex. 他のテキストでは、アダムは故意に悪魔をだます

：天国から追放されたアダムが土地を耕していると、悪魔が来て、この土地は私のものだから耕してはならぬと言う。しかし、もしはっきりとおまえが私（悪魔）に属していると書くなれば土地を耕してもいいと言う。

アダムは、私はこの大地が属しているものに属す、と答える

アダムは、土地が悪魔に属しているのは一時的なもので、やがてキリストが来て土地とその住民を悪魔から取り返すことを知っているのだから、悪魔をだましたと解釈される

西欧の伝統では契約は中性的（良くもなり悪くもなる）だが、その騎士道的な特殊形態においては記号の信仰から、言葉への敬意は名譽的な問題となる（悪魔への約束を守る騎士物語）

一方、ロシアの伝統において、契約はその聖なる性格から強度を引き出す 信仰の非慣習的権力がなければ、契約は強度を持たない 悪魔へなされた誓いは背かれる

中世社会において確立した関係システム（至上の権力と封土とを結ぶ相互義務システム）は否定的に判断される

契約による奉仕は悪で、神の奉仕としての奉仕は真正：君主と神との比較：神は世界の主、ロシア皇帝はその国家の主、父は家族の主

君主とその僕との関係は契約的であるが、兵士にとって、君主の力は神聖である

交換と契約は記号を養い、宗教的儀式や儀礼はシンボル主義や実用的行為へ向かう (p.145)

騎士道文化は記号へ向かう

行動の記号論的アスペクトはゲームのモーメントを強調する：行為の目的はその実践的結果でなく、行動のランゲージュの正確な使用に重きが置かれる：騎士道の世界ではトーナメントが闘いと等価である (p.147)

ロシアの封建世界では、トーナメント機能を果たすのは狩である：このタイプの行動様式は慣習性を排除する：行動の社会的意義における慣習の不在 社会の上層部においては行動様式のシンボリズムへ向かい、下層部においては実践的な行動様式の記号性の無レベルへ向かう
ex. ソシュール：シンボルと記号について

ロシア中世のシンボリック意識の観点からすれば、権力は神聖と真理の特徴を備えていた

権力は絶対であり、その前で個人は海の中の滴に過ぎない 個人は交換や契約を求めない
この純粋に宗教的な感情を国家レベルに広げると、社会にシンボリック的存在であるロシア皇帝についての記号性の転移を求める (p.148)

社会の他の構成員について求められるのは、純粋に実践的行為であり、その行動様式は希望性のゼロレベルではない

バロック期に文化システムが変化する (p.149)

この時期の変化は過去を受け継いだもので、過去との断絶ではない

公的イデオロギーの変化が文化レベルで顕著：価値の逆転 これまで低かった実践的活動の価値が上がる：シンボルの価値低下 tsar-ouvriere という考えも見られる (p.150)

この時期の文化の一般構造における契約の記号論的重要性も変化する 契約の概念は西欧文化の影響という支えを獲得する tsar もシンボルであることをやめる

18世紀の文化に染み込んでいる契約の精神が伝統的制度への態度を見直させる (p.151)

ダンディの文化 (p.152)

記号内容と記号表現との制度的繋がりのあそび：恋愛ランゲージュの辞書の作成
：Dreux du Radier, *Dictionnaire de'amour*, 1741

【ダンディイズム】 dandyism

めかしたて、ハイカラ趣味。ダンディ（しゃれ者）から出た表現で、しゃれたことば遣い、気どった態度、めかした服装を一般に向けて誇示する性向。19世紀初頭イギリスの摂政皇太子(プリンス・リーゼント)とその友人ブランメルG. Brunmel (1778 1840) の伊達(だて)趣味に発するといわれ、後者はボーべう (フランス語で美しいの意)・ブランメルともいわれた。ダンディイズムは俗悪な成金趣味に対し、洗練された貴族趣味を表し、文学的にはロマン派のバイロン、ミュッセ、ゴーチエら、19世紀末のワイルド、20世紀初頭のピーアバウムにもこの傾向がみられる。一般には、はでな服装、粋(いき)好みをいう。

船戸英夫 (C)小学館

うち言葉や花言葉も生まれる

モラル的文学においては、ダンディ文化の記号論的相対主義は無神論やモラル相対主義に結びつけられるが、ダンディ文化をその誹謗的観点からのみ検証するのは間違い

記号の自律的意識が形成されるのがこのダンディ文化においてである 個人中心的文化

18世紀末の社会的葛藤の緊張は文化の言語構造に他の変化をもたらす (p.154)

記号世界と社会構造との関係の見直し：啓蒙主義

ルソー：文明世界の欺瞞を告発しつつ、言葉の表現と内容の関係の慣習性のうちに文明の原理を見る

18世紀は革命的なパリのローマ式服装とパウロー世の騎士道的服装に行きつく

19世紀初頭の文化構成素としての演劇と演劇性

(Iouri Lotman, « Théâtre et théâtralité comme composantes de la culture du début du XIX siècle », pp. 156-178)

ピョートル・ボガトウイリョフ (民話学者：フォルマリスト)

：「演劇の基本原理の一つに reincarnation (再来、再生)がある」

演劇世界と演劇外の世界との相互作用の検証

芸術における作者と観衆の意識の3分類

：芸術と芸術外の現実とは、両者の差異が大きく、その溝は越えがたいので両者の比較すら排除されるような領域と見なされる

ex. : 18世紀において、エリザベス皇后の肖像画 (Caravaque 作：顔は現実の描写、首から下はビーナスのように裸体) にへの違和感はない 足元の鷲は権力の象徴

表象と内容とは類似ではなく、歴史的な慣習によるため、両者が混同されることはない

画布と観衆、舞台と観客の間の壁はのりこえられない

：芸術の領域はモデルとプログラムのエリアと見なされる

活動的影響力は芸術の領域から芸術外的現実へと向けられる

日常生活が芸術をモデルとして選択し、それを真似ようと勤しむ

：日常生活はモデル化されたダイナミズムの領域：日常生活は芸術が模倣する典型を作る

上記 において芸術が人々の行動に形態を提供するのに対し、ここでは日常生活の行動様式が舞台上の行動を規定する

どの点が慣習的かによって、上記3分類は、 古典主義、 ロマン主義、 レアリズム、 に分類される (p.157)

古典主義？

* 文学 & 芸術史ではしばしば19世紀初頭を「古典主義」または「ネオ古典主義」と位置づける

トマシェフスキー：古典主義の再来を「帝国」スタイルと呼ぶ

L. Ja. Ginzburg：カラムージン派は内容と形式において古典主義なのではなく、歴史的機能において古典主義：1810年台の文学に、システムや組織の精神、よき趣味の規範と論理的規律をもたらす (p.158)

* 文化研究者は古代に対する新たな渴望の流れを指摘する

当時のロシアでは古典への渴望が強かったため、その方向性の下で活動した芸術家はみんな大成功した：神話的情景を描いた花瓶やワシやスフィンクスの形をした香炉や椅子など

* ネオ古典主義は変装されたロマン主義だという説も多い (p.159)

* 古典主義においては芸術と日常生活との間に大きな垣根があるため

：舞台上のヒーローを日常生活で真似ることはない

：舞台上にヒロイズムがあり、日常生活では節度・作法 (bienséance) がある

19世紀初頭において、芸術と鑑賞者の行動様式との間の垣根は取り払われていた

演劇が日常生活に入り込み、人々の行動様式に変化をもたらす

革命家たちの演劇的生活：芸術は日常生活が模倣するモデルになる (p.160)

ナポレオン時代の荘厳な儀式への渴望

日常生活の演劇性：行動様式のレベルの変化

インターミッションの感覚 (p.166)：舞台空間は日常性とは異なるためそれを中断する...